

## Sheffield 滞在記（英国病理学会派遣報告書）

久留米大学病理学講座 竹内真衣

2024年6月18から20日にシェフィールド大学で開催された Sheffield Pathology 2024 に参加させて頂きました。派遣が決まるまで恥ずかしながらシェフィールドがどこにあるのかも知りませんでした。英国の中心部にあり5番目に人口の多い都市であるという最小限の情報のみで現地に向かいました。もう一人の派遣者である浜松医科大学の酒井先生とともにロンドンのヒースロー空港に降り立ち、3時間弱の電車の旅でシェフィールドに向かいました。空港から遠い事を心配していましたが、ロンドン市街中心部からシェフィールド駅まで直通電車があり、時間も正確で快適な移動でした。6月のシェフィールドは涼しく、昨今蒸し暑い日本と比べてとても快適な気候でした。時間がなく会場周囲のみの散策でしたが、歴史を感じる建築物が多く美しい街並みでした。

会場のシェフィールド大学は歴史ある大学で、坂の多い広いキャンパスに多くの建物が立ち並んでいました。学会は“The Wave”という新しい建物で開催され、概ね3セッションが同時進行する形でした。平日開催ということもあり人数は日本病理学会総会よりも少ない印象で、若い参加者が多いように見えました。色々なセッションを覗いてみましたが、診断のピットフォールなどのプラクティカルな話から研究まで多様な内容でした。研究発表はデジタルパソロジー関係が多く、日本との傾向の違いを感じました。スライドは文字を少なく図で説明するのがよい、と教えられてきましたが、多くの演者が文章を多めに配置して説明するスライド構成が印象的で参考になりました。

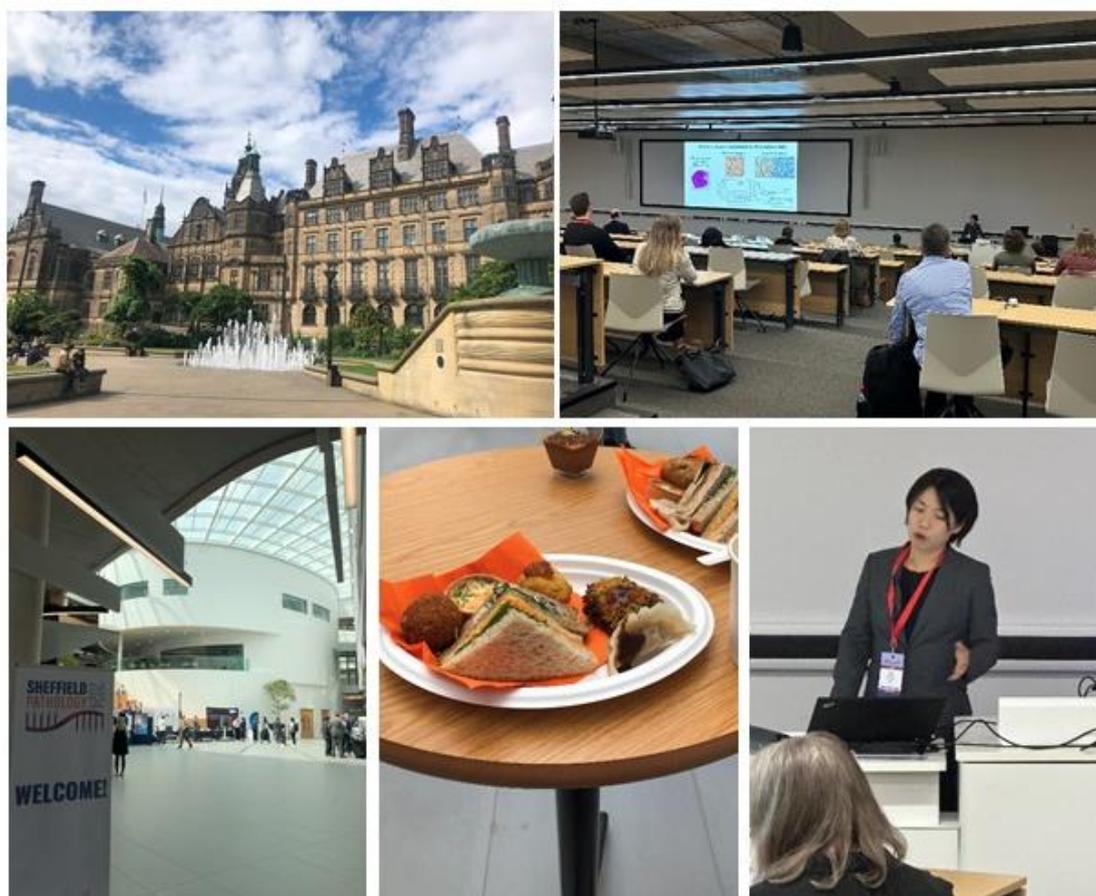
ランチョンセミナーはなく、昼食休憩にケータリングの軽食がビュッフェスタイルで並べられ、好きなものを手をつまんで取っていくスタイルで新鮮でした。休憩中に学会会長の Arends 先生や副会長の Coupland 先生にご挨拶の機会を頂き、3月の日本病理学会総会に派遣された Wong 先生ら英国のジュニア病理医と交流の機会を得ました。Wong 先生は日本での滞在与交流を大変楽しんでくれたそうで、滞在中色々親切にして下さいました。我々も次回の2025年日本病理学会総会に英国から派遣される先生と是非交流を深めたいと思います。

私は Plenary Session で成人 T 細胞白血病・リンパ腫の免疫微小環境について免疫染色と空間トランスクリプトーム解析による研究内容を発表させて頂きました。他の演題と毛色が異なるため不評ではないかと心配しましたが、温かく受け入れて頂き、無事発表を終えられて安堵しました。フロアからの質問はなく座長 2 名から質問を頂きました。質問を理解し私なりにお答えしたのですが、専門分野が異なる先生方の質問がやや予想外の内容で説明が不十分になったことが反省点です。貴重な経験として今後の学会発表に生かしたいと思います。

2日目の夜は数世紀の伝統のある Cutler's Hall で開催された Conference Dinner に招待い

いただきました。Cutler は人名ではなく刃物職人を指すそうで、シェフィールドは刃物産業で有名だそうです。歴史あるカトラリーやナイフなどが多く展示されていました。英国では伝統的らしいチキンのロースト、ポテト、野菜をメインとした料理を大変美味しく頂きながら、若手の先生たちと楽しくお話をさせていただきました。翌朝が早いので途中で失礼しましたが、地元のロックバンドの生演奏もあり遅くまで盛り上がっていたようです。

学会 3 日目の早朝にシェフィールドを発つという短い滞在期間でしたが、とても有意義な経験をさせていただきました。今後の研究・診療に生かして更に精進を重ねたいと思います。このような機会を与えてくださいました日英の関係者の皆様に心より感謝申し上げます。酒井先生と共に今後の日英交流に少しでも貢献させて頂ければ幸いです。



上段左：Sheffield の風景、上段右：会場内の様子

下段左：“The Wave”の内観、下段中：会場の昼食、下段右：演題発表中の筆者